

に朝鮮人猛勢押よせて攻ける折節元續の家中末兼孫兵衛忠良淺原備後守三浦四郎兵衛三人中渡近所へ働き城の様體をみて敵を押分切拂ひ城へ籠り加勢せしゆへ三郎兵衛運を開きけり此時三浦四郎兵衛藪木四郎右衛門討死せり手負も十三人有之宍戸殿家中衆働きの様子野嶋方より申上るに付輝元聞し召れ御感成れけりされは打廻りの衆歸り云けるはれいせんと云所より一里ほど此方に人數三四萬も集り山上りせし由聞し召れ又宍戸備前守元續三浦兵庫頭元忠に仰付られ罷越文祿元年六月山下に札を立日本將軍朝廷渡海の儀全別の子細に非す國政を行ひ民を安し置へき爲也早く在所へ歸り家業を勤め安堵すへしと書たれば山上より人數三十許下りて此札を見るより早く打碎て捨けるに依て其後又右の趣書翰に調へ竹にはさみ建ければ是をみて是非とも一戦望のよし返答なりと

らは一戦あるへしとて吉川殿を始め諸勢一同に敵陣の山下へ押寄て攻玉へは敵大勢打下し半弓を以て射立手強く防戦せり廣家公自身真先に進み五千の人數を以てかゝり敵の先陣を突崩し玉へは後陣も一時に崩れて敗北す其時二里程追討にし討取首合せて三千餘級なり日既に暮ければ惣勢本の備場へ飯り其夜は御陣を居られ翌早天にれいせんの館へ押寄て見玉へとも敵一人も居す皆欠落せり

秀吉公肥前國名護屋へ御下向の事

一文祿元年三月廿六日秀吉公京都を御出馬なされ其夜は攝州の茨木に御一宿也同年四月上旬藝州嚴島を御覽成れ此嶋に奇絶の瀧あり其風景に寄られ御詠歌あり夫より廣嶋の御城へ入せられ一日御逗留成れ輝元公は朝鮮におはしまし御留守居佐世石見守元嘉御城代は渡瀬左衛門大乃木五左衛門兩人也右京大夫秀元公は御留守にお

はしませども秀吉公御逗留間は安國寺へ御退あり秀吉公御機嫌能御逗留の中に秀元公を御前へ召出され御咄の序に輝元公の養子には此右京大夫然るへし此趣を朝鮮に至り輝元へ申達すへくの旨佐世石見守元嘉桂源右衛門尉元信へ木下半助殿を以て仰渡されたり此半助殿は秀吉公の御前第一の出頭人なる故取分御馳走成れ半助殿も此御方へ御入魂に付萬事相伺ひ差圖を請けり秀吉公御出馬の時分右京大夫殿へ御腰物時服等拜領仰せられたりかくて長府へ御着成れ仲哀天皇神功皇后の神祠を御禮拜夫より關の阿彌陀寺へ御座を成れ安徳天皇の御影を始め平家一門の畫像御覽なされ猶昔より古人詠歌の短冊も數多あるを御覽し秀吉公も一首短冊に遊されりかゝる折節藝州より佐世石見守元嘉御機嫌伺として下り出伺をどけ献上には昔をたはね臺にすゐて差出しければ御目見仰付られ

猶御好に思し召れける一種差上御満足の通御意なされかくて料理人を召出され此ちしやを汁にすへし庖丁しては風味あしくねち切かよしと也又仰られけるは此間御食のしらけ足らす鹽を入れてしらくけ白くなるなりとの御意ありかやうの事までもえろし召けるゆへ皆人舌をふるはしける石見守も首尾よく御暇にて退出せり翌日早々關の門を御渡りほとなく名護屋へ御着船あり御供の諸大名にて松平家康公一萬五千騎大和大納言秀俊一萬騎前田利家九千餘騎其外織田信雄上杉景勝奥北國の勢八萬餘騎並御旗本雜兵ともに三萬餘騎都合十萬餘の御人數御城の前後左右に陣を居られ御威勢勇しく形勢いふも疎かなり

秀吉公の御座船豊前大裡の沖に於て生石に懸る事

一毛利右京大夫秀元公へ木下半助殿より内意申越れけるは御見舞と

して名護屋へ御下り然るへく存るとの儀に付て文祿元年七月十五日御聞掛御出足なされ同十八日赤間關へ御着の處に大政所様御煩に付秀吉公御上洛にて今日小倉御着陣の由秀元公聞し召れ飛船を以て木下殿へ御問合の處に明朝御出船の間早々小倉へ御出仕然るへく由申越るゝに就て夜中御渡海あつて朝辰の剋御本陣へ御出仕則半助殿へ御相對成れける處に唯今御膳召上られたり去なから申上へしとて披露いたしければ則秀元公召出され是迄出仕御祝着の由御意なされ御盃を遣され御退出あり木下殿御同道にて御表へ御出の時半助殿桂源右衛門元信に云はれけるは秀吉公此度御上りにも廣嶋御立寄成るへくの由御意ありし間右京殿は御急き御先へ御返り然るへくの通なり源右衛門云けるは御座船は櫓數にて右京大夫御先へ参りけるやうには成難しいかゝ致すへくやといへは半助

○一年三計
に齡十る

殿御迹にても苦しからすとて其儘秀元公御船に召せられたり御座船は陸より五六町沖御上りあり然る處に御座船より急に御迹船を招きけり福原大炊是をみていかゝしたる事やと此方の御船頭に尋ねけり御船頭云けるは御座船生石に掛りたりと云さらは此御船を押付よと源右衛門下知に依て舸子とも急に乗付歴々の御供船よりも先なり其時御座船より五調の男二人岩の上へ下られ秀吉公御裸にて半助殿は御後ろより抱られ此方の船へ召せんとすれともいまた届かすいかゝはせんと源右衛門もあせる處に此方の手安船御座船と此方の船の間へ押入秀吉公も兩人の仁も手安船へ召れけるもへ源右衛門御側衆に向ひて此本船も右京大夫船なれば御召あれと云秀吉公直に御手を出さるゝもへ源右衛門片手にては彌帆柱ヤホシツを取片手を差出し御手を取やうやく此方の船へ召寄屋形へ入せられた

り其時十七八許なる御小姓衆練の羽織をぬき御後より召れたり源右衛門云けるは此船をは關へ付へくや直に上方へ盪せ申へくやと御傍衆まで伺るけ處に秀吉公御直に此磯へ付よとある也へ大裡の濱へつけ則御上り成れ船子の持たる櫃の上に毛氈を敷御腰を懸られたり其間に御供舟より悉磯へ上られ御前には樋口を始め御伽衆數多伺公なり其時秀吉公御意に右京大夫今日の忠義比類なし戰場にて深入をし難儀に及ひける時横鎗を突者は常にある事也此度のやうに人の命を助る事は稀なり惣別あの子は只者にてはなし夫もへ廣嶋にても輝元養子には此大夫然るへしと謂し也又輝元の養子に金吾然るへしとの事粗聞し召れたり是は何者の云たる事にやさは有ましくなり我等も辛勞して取たる天下を他人に遣すへしとは思はず其故親類なれば治兵衛に天下を譲り置けり輝元は親族數多

あり何れ成とも輝元了簡次第たるへし金吾は思ひも寄ぬ事なり何者か云たるかと尋ぬるに黒田勘解由めか云出したるよし中々曲事の儀と云事也と御意なり御側近く秀元公もおはしますゆへ此子か輝元養子に成ましく事にてなし然るへく思し召ける間彌此通りを輝元へ申遣すへしと重疊御意成れたりさて又輝元隆景我等か用に立人なれば能して遣され度思召れ唯今の國は都近し九州を望みなくは九州九ヶ國に長門國一ヶ國添て十ヶ國遣すへしと云ければ輝元隆景御意次第何れにもと云はとに其方望次第といへは御意忝し去なから先祖代々の國なれば今の通りに罷居度と云はとに心の儘にとて前々のとく申付たり是程までに思し召れしを毛利家逆意など、明石めかいふは曲事にて悪き奴なりと御意なされける處へ木下殿小幅なる紙に書たる物を御前へ上られたり其時源右衛門を召

て是を右京大夫に見せよと御渡しある由へ則秀吉公の御前にて秀元公へ差上げければ御覽して御懷中なりかゝる所に秀吉公の御座所より二三町東の磯へ小船を着大の男の兩腕をとらへ多人數付て御座所近く参り是は明石與次兵衛と云惣船頭の頭なり秀吉公御覽して今少し此方へと御意成れ與次兵衛すゝみ寄ける處に年齢十八九許なる人後より首を討落しけり是は早川源吾殿と云人の由秀吉公御覽成れ近比悪き奴なり見こらしめの爲に此所獄門に掛させよと御意也されは木下殿御挾箱を御傍へ持参るにて御脇差を差出されければ則右京大夫殿を召て忝御意成れ拜領仰付られたり此脇差は原藤四郎吉光なり桂源右衛門伊秩安房守兩人をも召出され御道服拜領作せられたりかくて秀吉公御船にて御登り秀元公は御迹より廣嶋へ御歸り成れける處に半助殿より奉書を以て早々御上京有へ

くの通仰越れ早速廣嶋御出船にて御上り成れければ大政所様御逝去に付御目見も相成す御滞留なり九月に御忌中あき名護屋へ御下向に付半助殿へ御問合われは明日未明に御出賀の間其御心得にて御出仕なされ御門にて御目見然るへくの由申越れ則未明に御登城われは疾御出賀にて御跡より御急なされ牧方の御茶屋へ入せられける時御門にて御目見ありければ秀吉公御誕に秀元事侍従に仰付られ委細立以法印へ仰渡れける間早々上京あるやうにどの事にて則御暇下され御上洛有ければ立以法印取持にて首尾よく御参内成れ御官位相調けり此時秀元公十四歳なり

輝元公御病氣に依て御名代として秀元公朝鮮御渡海の事

一輝元公朝鮮御渡海の比は安藝の宰相たり八ヶ國の大將たるに依て關白秀吉公より御陣中へ差出されける御制法等度々安藝宰相殿と

當る夫より渡海の諸大名衆へも仰傳られ其御威勢勇々しく有ける處に文祿元年九月輝元公御病氣に成せられ既に冬近くなり朝鮮國一入寒氣強く御氣色滯りけり夫に付小早川殿吉川殿御談合の上醫師の事柳澤新右衛門景祐を以て名護屋へ仰上られたり秀吉公聞し召れ延壽院玄朔道三へ仰渡され則渡海なり道三御藥御相應にて漸々御全快のやうに相見えけるゆへ道三も歸朝いたされけり則御禮として林肥前守就善を名護屋へ差上されたりけれども朝鮮寒國なる故御氣色すきとなき通秀吉公聞し召れ御名代として右京大夫秀元公を朝鮮へ渡海仰付られけり時に十五歳安藝の侍従といへり彼國着岸あらは輝元は歸朝あるへくの旨仰出されよつて文祿二年三月廿日秀元公藝州廿日市御出船有て先名護屋へ御着成れける處に早速秀吉公御前へ召出され御馳走御茶まで下され時服等拜領作せ

られたり御家老桂右衛門元信伊秩安藝守をも召出され御道服遣されけりかくて秀元公は同四月釜山浦御着岸早速輝元公御歸朝なり林肥前守儀は秀吉公の御意を以て年内休息仰付られ秀元公御渡海の時御供いたし秀吉公より御返詞を輝元公へ申上けり輝元公御歸朝の上文祿四年正月六日今度朝鮮御渡海の御軍勢に依て中納言に任せられたりされは秀元公は朝鮮御残り御若年たりといへども輝元公の御名代なれば毛利家の軍兵皆秀元公の御下知に隨ひ軍忠を勵み歴々手柄の内に小早川殿久留米侍從秀包公吉川殿宍戸殿毛利元康公此外御一門方の家中くまて別して粉骨を盡されたりまかれは小早川殿開城浦に御陣を居られ小西攝津守行長は平安道にて明兵に掛合せ難儀に及び勝利を失ひけりまた開城浦在陣の衆皆引退く隆景公に於ては縦此所にて戦死すとも引ましくと有ければ大

谷刑部吉繼來りて隆景爰にて討死せられてい味方のよはり也是非とも御引あれとて誘引て退かれたり尤秀元公廣家公立花宗茂筑紫上野助廣門其外も皆都へ歸られ其後明兵承りて都を圍む諸將の云一戦もせず爰に引事は有ましくなり一度手に入たる都を捨てはいかゝと評定區々なりされとも諸將ともに表向には強みをいはれされとも口出しあらは退たく下意を小早川殿察し玉ひ御所勞なりとて出座なかりし處に三奉行の内二人來りて是非とも御出座あれと申され此上はとて出座あれは三奉行を始め諸大將云れけるは小早川殿聞玉へ此都を持つめすしては日本の耻たるへしと有ければ各仰らるゝ處も一理あり愈此都を御持詰有へくとの御規定なりや諸將の御吟味に過たる儀はなしと仰られける處に又各云れけるは秀吉公も隆景をおもに談合すへしと仰られたれば御遠慮に及ましと

なり隆景公さあらは氣付の所申さぬもいかゝなり先某存しけるは第一此廣き都の内へ大勢を引受日本の小勢を以て勝利有へきにあらず二には日本勢此都にて討死して後代まで汚名を残す事往々我朝の辱なり三には諸卒兵糧もはや盡へし長居してみすゝ餓死せん事何の詮かあらん唯此都を焼拂ひ夫を品にして御引取後の軍を專一にせられ然るへしと仰られければ諸將いつれも尤至極と同意せられされは引取に規定すへしとて皆々披かれんとす其時隆景公又仰られけるは各方には只今まで此都を御持詰有へくと仰られしものを何の子細もなく引退るへしとは不覺なり大明の猛勢押し寄ると聞て退く時は逆たるに似たり是非とも爰は一合戦して退かては叶はぬ所也さなき時は敵に付送られ追討にせらるへきと存しけりまかし某事各の御氣色をも憚からず申過したる事なれば明日

の合戦は我等すへし其間に人數を繰都を放火して退き玉へどては
 や備を定め玉ふ隆景公相備の内一の先を柳川豊前守調信立花左近
 宗茂二の手は久留米の侍従秀包筑紫上野助廣門毛利七郎兵衛元康
 三の手は隆景公の手勢なり文祿二年四月廿日の夜半より三備の兵
 南の大門を押出る次に隆景公旗本の先手栗屋四郎兵衛景雄井上五
 郎兵衛景貞兩將出張す一の先手柳川か軍兵漢南人の大勢に突立ら
 れ柳川か先將十川右衛門大夫を始め數多討死して生殘る兵稍々柳
 川か旗本へ集りて息をつく其時黒田長政大谷吉繼馬を飛して來り
 隆景公へ申されけるは明兵は智あり勇あり朝鮮人のやうに思ひ玉
 ふなど云捨て則隆景公の先陣へ往て同列す栗屋景雄井上景貞も兩
 陣をひとつにして戦はんと相談す井上か手勢佐世勘兵衛正勝云け
 るはその儀然るへからすと諫むるに依て兩陣左右に備を立る其所

の地形高卑うね谷ある廣原也敵寄來りて對陣し大筒小筒を以てせ
 り合ける處に栗屋か相備三吉太郎左衛門元高か旗持鐵炮に中りて
 死す殘る旗の手さはくをみて明兵鯨波を上て強く突かゝるに依て
 栗屋か備へ立足になれり四郎兵衛馬を左の高みへ乗上て下馬せり
 栗屋掃部元好益田七内景祥後河内守村上八郎左衛門景廣石原太郎左衛
 門鳥越五郎兵衛河内太郎左衛門各鎗を取て働きすへて三十四人ふ
 みこたへてかせきけり井上も押かゝらんとする處に佐世勘兵衛正
 勝立寄馬の口をひかへて暫く待玉へ栗屋か備頓て崩れんと思ふな
 りと云案のとく崩れて引退く敵勝に乗て追來る其勢上り坂になる
 を見て時分よし蒐り玉へと云井上か備高みより一同に突てかゝる
 敵はつかれ味方は荒手なり栗屋一手も取て返し相戦ふ清水源三郎
 景治も押かゝつて戦ひ柳川か一手も味方の左に備て居たりしか横

合に突て掛る方々より寄かゝるに依て漢南勢突立られて敗軍す開
城浦の川の邊まで追詰首數三千餘級討取明兵悉く引退くを見て味
方の勇者猶追んとす爰に立花家の老臣小野和泉守と云者若武者を
制していへるは明兵山野に充滿せり窮鼠却て猫を喰と云喩にて長
追無用なりと云諸卒も尤也とておはす各都に歸りて後栗屋四郎兵
衛と井上五郎兵衛高名の争せしに依て釜山海にて井上伯耆守春忠
是を論して同じ高名と定む依て栗屋井上にはおなし御文躰の御感
状下され清水景治其外へも銘々御感狀遣されけり五郎兵衛は伯耆
守か嫡子也四郎兵衛は伯耆守か婿也兄弟間高名の争ひ誠に武士道
なれば尤也と皆人感しおえりさて又隆景公朝鮮にて自分一手の衆
働きの次第度々の儀なれば廉あるはかり記せり惣して隆景公の一
手へ討取首をは悉く鼻をそき鹽漬にして桶につめ首帳をそへ名護

に井伊

屋へ送られたり又或時山野に陣取て居けるに夜中大虎來りて人を
つかんで山中へ入其跡をつなきてみれば深山の巖の上にて彼人を
くらひ首と股はかりを殘し置其傍に虎伏て居たりけるを鐵炮をそ
ろへ討殺し是をも名護屋へ送られけると也又都より三里程西の川
上望加井といふ處に唐人新城を構へ數萬騎楯籠りけり此城石垣高
く築上石壁屏風を立るか如し一方は大河一方は沼にて人馬の足た
ゝす一方は瀧山也一方ならては敵よせの平地なし是を便りて諸勢
攻かけたり一番は小西攝津守行長二番は三奉行石田治部少輔三成
増田右衛門尉長盛大谷刑部少輔吉繼三番は黒田甲斐守長政四番は
宇喜多秀家五番は吉川藏人廣家六番は毛利七郎兵衛元康公吉見二
郎兵衛元頼の一手七番は久留米侍從秀包公の一手八番は小早川左
衛門佐隆景公の一手其外御本手よりは熊谷豊前守元直を手頭とし

て兒玉五左衛門尉景雄後豐前守差添られ相従ふ面々には兒玉六郎右衛門尉景之高須宗左衛門尉後筑後守國重又右衛門尉元恒後山雲守河野太郎兵衛元辰後讀岐守佐々部又右衛門尉後若狹守小早川殿御内にて包久内藏允景勝裳掛彌左衛門景成鶴飼新右衛門尉元辰末永七郎右衛門尉豐澄福岡太郎左衛門重繼後本名草川に改清水源三郎景治後左衛門湯原彈正元綱此外歴々遣されたり此城寄口切所にて大勢一所に蒐る事成かたきに付て早朝より終日攻けれども城中より石火矢を打かけ矢を射かくる事雨の如くされとも諸家中の軍士面もふらす三萬餘騎聲を上無二無三に攻蒐けたり其中に宇喜多秀家の家中戸川肥前守か一手吉川廣家公の一手毛利元康公吉見元頼の一手何れも二の曲輪まで攻入けれども城の責口狭く續く勢なき故唐人本丸より出て切崩しけり其時吉見家中にて明石與右衛門中屋善四郎戸崎彦右

衛門三人いさきよく討死せり其外諸家中歴々討死あり城中より射出す矢宇喜多秀家の指物に中り石田三成の馬印を射破り吉川廣家淺野長政加藤嘉明矢疵を蒙うる又吉見元頼の鎧の袖に矢幾筋ともなく中れりかく大名衆にさへ矢の中る程のきひしき戦ひなれば下々手負死人其數をしらす諸家の事は委しくわからず御本手吉川殿小早川殿宍戸殿其外毛利に加りたる衆の家中へ何れも粉骨を盡されけり此城切所なるに依て諸將も攻わくんで一先卷解さんと評定ありし處に朝鮮の軍士戦ひ疲れて城を明去し也此比秀元公は朝鮮に在陣し給ひ處々に於て御合戦猶御下知を以て毛利家の軍兵も粉骨を盡しけりされは蔚山に於て新城を築るへしとの御談合に付毛利家より人數一萬人加藤主計頭清正へ御加勢成れ御手頭として宍戸備前守元續を差越れ清正と申談し文祿三年十月上旬より蔚山

の御普請始り同十二月上旬に大形出来此方の御町場を加藤殿普請奉行衆へ引渡し翌日は釜山海へ引取へくの處に城を請取事延引の内同月廿二日の未明に漢南人寄來冷泉民部少輔元満か陣屋へ切掛りけるゆへ合戦に及けれども多勢に叶はず元満戦死せり冷泉か家人吉安太郎兵衛満定伊賀崎又兵衛満重白松善右衛門満明其外歴々討死せり手負も亦數多あり其時備前守殿掛合せ比類なき働きせり宍戸殿御内にて江田市兵衛藏田三彌江田彌六山路惣太郎井上又六兒玉五兵衛萬代彦右衛門大垣左吉若林新太郎井口仁右衛門板花理兵衛此者とも別して働き終には討死せり宍戸殿一手の衆も涯分働かれけれども多勢に無勢ゆへ漸廿二日の未の剋に敵放れいたし城の外搆へまで惣勢楯籠りけり此赴を注進に依て加藤清正節海より廿二日の夜半過に蔚山へ罷越れ申されけるは宍戸殿の内末兼孫兵

衛家明神田六兵衛久行兩人へ鐵炮五十挺宛相添浮武者にして弱き所を見合せ加勢させられけるやうにどの儀なり清正の持口には加藤與左衛門正俊を差置れ宍戸殿持口には深瀬次郎兵衛忠良罷在其夜は堅固に持堅めける所に翌廿三日の辰の上剋に唐人猛勢詰蒐惣攻にし城の西の門福嶋左衛門大夫正則の持口より唐人乗込外構の間を取切に付味方是をみて面々の持口を捨我先にと城中へ蒐入らんとす然れども深瀬儀は最前清正元續相談の上差置れたる所と存し堀の手を堅めける所に加藤與左衛門所より雜田傳右衛門と云者を使に差越云けるはそこにて討死せられては存する人有まし早々城中へいり玉ひ清正目の前にて用に立るへしと云に付大勢の中を押分切ぬけ本丸東の門口まで取上りけり此門は御目付大田飛驒守政信の持口也しか兼て深瀬次郎兵衛を御見知にや長刀の柄を門外

へ召出されしに依て是に取付城中へいりて備前守殿を尋ねけれとも見當らす心許なく存し埋門の方をみれば此口へも敵詰蒐けるを成羽紀伊守親成本名三村末兼孫兵衛家明兩人突て出追拂ひけれ敵退散せしに依て其透に備前守殿も二の丸へ參られたり此城持口本丸には加藤主計頭清正大田飛驒守政信淺野左京大夫幸長二の丸には宍戸備前守元續三の丸の儀は宍戸殿一手の衆籠城の御手賦なりける處に三の丸の普請半途ゆへか各遲參の趣を清正見及はれ森下儀大夫と云者を差越れたりさて三の丸は大事の敵寄なり何とて明置れるやとの儀に付元續より一の手の衆へ云れけるは各三の丸を御辞退の儀是非に及はず當城落去におゐては本丸二三の丸も一同の事なりしを御忘却あるやと云れければ則口羽十郎兵衛元良和智勝右衛門廣世日野新次郎元重後上總罷越けりされは吉見次郎兵衛元

頼の家來吉見四郎兵衛頼宗進み出て出けるは元頼若輩の間備前守殿御傍に置れ下さるへし吉見か人數の儀は此四郎兵衛召連參ると云捨早速罷越り引續淺口少輔九郎三澤攝津守爲虎三吉太郎左衛門元高天野五郎右衛門元信内藤修理亮元義三田五郎右衛門平賀木工頭元宗三尾四郎兵衛元尙本名井原三刀屋四兵衛成羽紀伊守親成桂孫六元信後大隅守野山清右衛門直續石蟹市右衛門伊達三左衛門赤木丹波守周布吉兵衛元次市川孫右衛門吉田孫右衛門馬屋原彌右衛門檜崎清兵衛元信福瀨左衛門尉有地民部少輔元信其外歴々三の丸へおり面々の持口を守り城中相堅り居たり文祿三年十二月廿二日の夜より毎日毎夜稠しく攻め驚かしけり同廿四日の夜毛利家より足輕五百人すくり其頭を相副大明の天會魏摩兩大將の本陣を志し夜討をかけ數千人討取百萬の軍兵とも散々に射立られ引退く仍て毛利家

勝利を得られたり同廿五日又大勢押寄てとく敷攻ける處に明兵の内より岡本越後と云者素は加藤清正の家中たりしか子細あつて大明國へ走り居住せり又田原七左衛門と云者是は宇喜多秀家の家中なりしか出奔して明兵の中にあり同廿七日の朝兩人ともに城近く立寄矢とめを乞て云けるは兩人事先年は加藤清正の家中にて岡本越後宇喜多秀家の家中にて田原七左衛門と云者にてあるなり御籠城の躰御痛はしくなり明兵八百萬騎を城中の小勢にて防戦とは中々蝸螂か斧蛇の口の繩にてこそあれ何とて取扱ひ各の御一命助け進し度存し是まで罷出たりと云仍て廿七日より廿九日までは面白くあひしらひけるゆへ城中少しくつろきける處に右の扱ひ申切て同年十二月晦日より明る文祿四年正月三日までは夜白の境もなく攻戦ひけりされは釜山海より後詰として毛利秀元公數萬の軍

兵を引卒し蔚山の川向ふなる大山に御對陣有に依て大明の軍兵とも日本の猛勢後詰するどみて翌四日辰の一天に大明勢悉く敗軍す籠城の諸卒も運を開きけり仍て秀吉公より秀元公へ御感狀下されたり其文に曰

今度漢南季郎耶碩郎耶兩將軍引卒百萬騎之軍兵朝鮮之爲救急難俄依令出張各及難儀惣軍勢周章騷動評定區々也處其方爲先勢挑合戰即時切崩唐人之首三萬八千餘級討捕唐人敗北之由從備州中納言注進之趣被聞召届候小早川吉川立花以下古今之至剛武勇不始于今候殊蔚山加藤主計籠城之砌令後詰數萬之軍勢引廻兩度之働神妙也彌可抽忠節候猶歸朝之上叙官位可被加褒美候仍感狀如件

文祿四二月廿八日

秀吉 御朱印

毛利右京大夫殿

大和大納言殿の姫君を毛利秀元公へ御婚禮の事

一文祿四年の秋毛利秀元縁組仰付らるへくの間人數をは穂井田元清に預け釜山浦に残し置秀元計歸朝有へくの旨秀吉公の仰に依て同九月に御歸朝成るゝの處に大和大納言殿の姫君を秀吉公の御養君に成れ遣さるへくの旨輝元公を召出され仰渡されけり又秀元公には今度晋州に於て諸手に勝れ秀元一手へ唐人數萬の首を討取ける忠賞として宰相になし遣さるゝの旨仰出され官位御昇進なり同年の暮秀元の御婚禮相調けり秀吉公の御養君たるに依て御供衆皆歴々なり御輿請取役は毛利大藏大輔元康渡邊飛騨守長也長柄の輿御召替ともに十八挺網代の輿三十六挺乗物二百十六挺御供の侍何れも諸大夫の衆也秀吉公も御女中方御同道にて戸田民部少輔屋敷へ

御下なされ御棧敷にて御見物成れけり都鄙の貴賤巷につとひ平伏して見物せり此時秀元公十六歳姫君は十七歳にならせられたり是までかやうに美麗を盡したる婚禮は天下無双と沙汰せりされども慶長十年御歳廿二にて御掩粧御子とてもなし其後家康公の上意にて松平因幡守元康の御息女御縁組仰付られ御婚禮相調けり

日本勢朝鮮へ再渡の事

一慶長元年遊撃といふ唐人來朝して大明の國王より日本へ書翰を捧さける處に其文體關白秀吉公の御氣色に應せず仍て又御人數渡海仰付らるへくの通慶長二年正月元日に仰出され同年二月に御人數付備定め城番の衆御書付差出されけり此度は輝元公の御名代として秀元公御人數召連られ御渡海有へくの旨なり同年四月下旬伏見御發駕なされ備後の國にて三原へ御立寄隆景公へ御暇乞成れける

楊元[△] 婁安^{一〇}に

則隆景公より秀元公へ以來まての御異見など成れたり夫より藝州
 廣嶋へ御着なされ八ヶ國の人數を召連られ慶長二年五月廿八日廣
 嶋御出船にて朝鮮へ御渡海なり其比小西攝津守行長は秀吉公の御
 前あしく成也へ此度軍忠を抽て御機嫌に應しけるやうにいたし度
 とて正月十四日肥前の國を出船し渡海せり加藤主計頭清正も同十
 五日出船なり兩人ともに釜山浦へ着いたし城の普請兵糧の貯長陣
 の支度せり其間に日本勢悉く六月上旬には釜山浦又竹嶋へ着いた
 せり然る處に沈惟敬方より婁國安と云者を行長か陣所へ差越云け
 るは我等日本へ志しを通しける事顯れて囚れ居たりされとも其志
 し猶變せず先南原の城は又全羅道の節度使李福男此兩將城主たり
 城中の人數も多からず貴所の諸將御談合有て責給は、必ず落城す
 へし南原の城は東に雲峰鳥嶺あり南に三浪大江あり道は金海竹嶋

に通し朝鮮に於て要害の地なり右に閑山嶋あり邢玠遼に兵三千を
 以て守らす陣愚衆二千の人數を以て金州にあり朝鮮の將全應瑞李
 元翼雲峰にあり權慄元均閑山島の邊に居り皆南原の援兵なり右の
 處々に押への兵を置玉は、子細有ましくと告來りけり行長悦ひ各
 と談合せしめ急に南原を攻めて催し有けれども七月初めより大雨
 降續き延引せし處に朝鮮の武將元均明兵の水軍をかたらひ軍船を
 催し釜山浦へ寄來の由敵方より告知するに依て此方より藤堂佐渡
 守高虎菅平右衛門盛之其外舟手の面々差向られたり敵方案外逆寄
 に逢けるゆへ皆々退散せり仍て此方の兵光陽の豆耻津に至りて亂
 れ入南原の近所なるに依て宇喜多秀家の一手小西攝津守行長を先
 手にて嶋津兵庫義弘蜂須賀彦右衛門家政長曾我部土佐守元親加藤
 左馬允嘉明生駒讚岐守一正其外惣勢五萬餘騎にて慶州を右に見雲

峰鳥嶺を押へ南原に馳向ふ秀元公の御一手には加藤主計頭清正を
先手にて黒田甲斐守長政淺野左京大夫幸長毛利壹岐守高政吉川藏
人廣家宍戸備前守元續吉見長次郎廣行吉見元續の家其外中國勢六萬
餘騎慶州を發馬し密場大丘を過て全義館に打入在陣して明の大兵
を押へけり是は躰に依て合戦有へきたり也小早川秀秋公よりも山
口玄蕃頭伊藤雅樂助南部武右衛門を大將として八千餘騎差出され
けり此者とも忠清道へ發向して雲峰に陣取る處に敵は一戦にも
及はず北落けり嶋津兵庫頭義弘加藤左馬助嘉明兩人は圍に取當り
全州に向ひ是を押へけり諸方の押勢首尾せしに付同年八月十三日
秀家の一手三萬餘騎南原へ押寄急に攻るの處に城兵手強く防さけ
るゆへ荒手を入替晝夜攻けれども一しほも付す味方に手負死人数
多ありされは小西行長工夫を以て攻口をくつろけ遠攻にせりかく

て敵の様躰をみせければ城兵晝夜ともに三日休息なしに防戦し草
臥て十六日の夜は前後も覺えず打伏けり依て小西事十七日の未明
に手勢計召連城の南門へ忍ひ寄門の扉を打破り責込ければ南原忽
落城せり大將楊元は帳中より裸にて北出死を遁れたり李福男は戦
死せりすへて諸手へ討取首數三千餘級生捕數百人あり慶長二年八
月十七日落城也小西攝津守行長大きに佳名揮へり秀元公の御人数
は全義館にて人馬を休め都近所へ御働九月廿五日慶尙道に御陣を
居られけり翌廿六日の早天に稷山水源と云所へ敵出張せり慶尙道
は都遠からさるゆへ日本勢直に王城へ働くへしと存し副總兵解生
といふもの防戦すへきかために朝鮮の兵五百人はと先に立解生人
數を卒して出張せり黒田甲斐守長政の先手栗山備後守後藤又兵衛
尉五百人餘にて突てかゝり相戦の處に楊登山午伯央と云兩將解生

に央一
英一

に加勢して押來り取圍めりされども後藤栗山少しも恐れず前後左右に働き圍を破りて出る黒田長政是をみて旗本二千の人数にて寄蒐られたり秀秋公の御陣には栗屋四郎兵衛景雄井上五郎兵衛景貞裳掛彌左衛門景成など武功の者居けるか敵の様子を見て是は大勢にて迹よりいかほと來るへきも知す聊爾の働御無用也とて御山に柵をふり段々に御人数を備られたり毛利の先將宍戸備前守元續無二無三に突てかゝり攻戰ふ處に解生か人数裏崩れして逃ければ李益喬劉遇節と云兩大將助け來る解生是に力を得て取て返し相戰ふ黒田長政宍戸元續急に突てかゝり敵の多勢を切崩す宍戸殿家中にて中所源三兵衛久秋拔群の功名せり黒井五郎兵衛元往渡邊河内守も手柄しけれとも手負死人數多あり備前守元續下知をなし馬上の者は馬にて敵を乗倒し歩行者に首を取せよと申付られし故深瀬

次郎兵衛忠良敵十人乗倒し首をは人に取せり又敵四十餘騎許一丸に成て退きける真中へ次郎兵衛乘掛組打の高名なれども其身も數ヶ所手を負けり此段を熊谷豊前守元直天野五郎右衛門元信よく見届秀元の御前にて取合され討取首御實檢にて御感なされけり井上五郎兵衛景貞栗屋四郎兵衛景雄兩人も御前に居て取合せけり此合戦に吉見長次郎廣行若年なれども晴なる高名し終に敵叶はずして退散し日も晩景に及びける由へ味方も長追せず各打納られけり毛利家へ討捕首其數をえらす黒田殿一手へも首數多打取れけり其後十月十日比全羅道の内せんしゆと云所にて宇喜多秀家一手此方の御一手一所に陣取して御談合には追日寒氣強く成ける間先釜山浦近所へ御打入有へしとて道筋を替先秀家一手引退れけり其次秀元公御一手も傳えに居られける城主召連られ釜山浦近所やうさんと

云所へ御打入なり淺野左京大夫幸長宍戸備前守元續殿也

惣して斯のとき書記せる事數多の舊記を見合せなを井上宗玄
梨羽紹幽二老の物語を覺書にしたるを以て引合せ合戦の勝敗
其都合を述て詳なる事を得ず朝鮮渡海の軍士は毛利家に歴々
あり舊記になきをは書載す御感狀など見たるはを端々に書加
へたり他家の事に巨細に知されは猶以て記さす加藤清正の事
は彼家中に木村又藏と云者後に毛利家に仕へて此事を語りし
を聞書して置たるを以て荒増書たり此外朝鮮陣以後の軍記其
數少からされは記すに暇あらず後世同好の人をまつのみ

明治三十一年十二月十一日印刷

明治三十一年十二月十五日發行

東京市赤坂區青山南町六丁目十二番地

長周叢書編輯
兼發行者 村田峰次郎

同 京橋區山城町六番地

印刷者 堀田道貫

同 所

印刷所 堀田印刷所





